

入院中の子どもに付き添う母親の看護婦に対する役割認識と役割期待の充足 — 相談・指導に焦点をあてて

2階東病棟 北村 美鈴・伊野 真紀・水間美智子
高知女子大学 ○武市 光世

I. はじめに

子どもの入院に伴う母親の不安や心配は強く、看護婦の援助も母親の精神的負担の軽減に焦点があてられる。母親への精神的ケアは、不安や心配を表出・相談できるような環境調整、病気に伴う生活指導や病状の説明などが中心となる。しかし現実には、母親が不安や心配を表出・相談できるような環境づくりが不十分であり、質的環境の不備を問題として捉えている。また、指導面においては看護婦の母親への指導の必要性に関する認識が低く、母親への指導が計画的・統一的に行われているとは言い難い。そこで今回、母親への援助の質的向上に役立てようと、当病棟に入院している子どもに付き添う母親が、看護婦に相談や指導面においてどのような認識をもち、期待を抱いているかについて検討した。

II. 研究目的

入院している子どもに付き添う母親が、①相談及び指導の援助を誰の役割として認識しているか（役割認識）、②看護婦に期待する相談および指導に関する援助は十分に得られているか（役割期待の充足）について明らかにする。

III. 研究方法

1. 調査期間：1997年4月30日～同年8月31日
2. 調査対象：当病棟に入院した子どもに付き添った経験があり、調査に同意の得られた母親45名
3. 調査方法：独自に作成した質問紙を用い、無記名によるアンケート調査を行った。質問紙は自由回答と選択回答を併用した。
4. 分析方法：自由回答（母親が考える看護婦の仕事と看護婦に期待すること）はKJ法により分類し、選択回答（相談・指導に対する母親の認識や期待）はそれぞれの項目について百分率で比較した。

IV. 研究結果

1. 対象の背景

平均年齢は母親が33.1 (±8.2) 歳、子どもが5.7 (±6.4) 歳であった。付き添い期間は平均3.2 (±1.9) ヶ月で、2週間～1ヵ月以下が15名 (33.3%) と最も多く、次いで6ヵ月～1年未満及び2週間未満が9名 (20.0%) であった。母親の付き添い経験は、初めてが28名 (62.2%)、2回以上は17名 (37.8%) であった。又子どもの入院時、養育必要な同胞がいた母親は25名 (55.6%)、職業を持っていた母親は19名 (42.2%) であった。尚、対象者全員が子どもの入院に付き添いが必要であるとらえていた。

2. 母親の看護婦に対する認識と期待

1) 母親が考える看護婦の仕事

看護婦の仕事については、内容について答えた母親と印象について答えた母親がいた。仕事の内容は、74ラベルから10カテゴリーに分類できた。この中で、「患者あるいは、患者の家族の不安を少しでも少なくするように働きかける」というような“患者や家族の精神的ケア”と答えた母親が20名 (44.4%) と最も多く、次に「患者さんの身の回りの食事、排泄、清潔の援助」というような“患者の身の回りの世話”と答えた母親が13名 (28.9%) であった。仕事の印象は、13ラベルから6カテゴリーに分類でき、“きつくて大変な仕事”という印象を持った母親が6名で最も多かった。

2) 母親が看護婦に期待すること

26ラベルから9カテゴリーに分類できた。この中で、14名 (31.1%) の母親が「具合が悪い時や精神的に疲れている時に、優しく手当てなり相談にのってほしい」といった“相談、会話などのコミュニケーション”に対する期待をあげていた。その他に、“医療ミスをしないこと”3名 (6.7%)、“適切で早急な対応、処置”2名 (4.4%) などがあつた。

3. 相談・指導に関する母親の役割認識について (表1)

母親の相談は37名 (82.3%) が医療者と家族の協力と認識していた。また、入院生活指導は18名 (40%) が看護婦の役割と認識していた。入院症状説

表1 相談、指導に関する母親の役割認識 (名 (%) n=45)

| | 看護婦 | 医師 | 看護婦と医師 | 医療者と家族協力 | 無回答 |
|--------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------|
| 母親の相談 | 3 (6.7) | 2 (4.4) | 2 (4.4) | 37 (82.3) | 1 (2.2) |
| 入院生活指導 | 18 (40.0) | 5 (11.1) | 8 (17.8) | 13 (28.9) | 1 (2.2) |
| 入院症状説明 | 9 (20.0) | 15 (33.3) | 14 (31.2) | 6 (13.3) | 1 (2.2) |
| 退院生活指導 | 6 (13.3) | 17 (37.8) | 13 (28.9) | 8 (17.8) | 1 (2.2) |
| 退院症状説明 | 3 (6.7) | 24 (53.3) | 11 (24.4) | 7 (15.6) | — |

明及び退院後生活指導は医師単独の役割と認識していた母親が、それぞれ15名（33.3%）、17名（37.8%）であり、看護婦と医師共有の役割と認識していた母親が14名（31.2%）、13名（28.9%）と両者にはほとんど差はなかった。退院後症状説明は24名（53.3%）が医師の役割と認識していた。

4. 相談・指導に関する母親の看護婦への期待充足について（表2）

相談に関し
ては31名（68.9%）が看護婦に役割期待をもっていた。

表2 相談、指導の関する母親の役割期待の充足（名（%）n=45）

| | A | B | C | D | E | 無回答 |
|---------|---------|-----------|-----------|----------|----------|----------|
| 母親の相談 | 3 (6.7) | 8 (17.8) | 18 (40.0) | 2 (4.4) | 8 (17.8) | 6 (13.3) |
| 生活・保健指導 | 3 (6.7) | 15 (33.3) | 10 (20.2) | 5 (11.1) | 7 (15.6) | 5 (11.1) |

*看護婦に援助を期待している(A~D)A:十分得られている B:まあまあ得られている
C:あまり得られてない D:全く得られてない
*看護婦に援助を期待していない (E:援助は必要でない)

そのうち11名（24.5%）が充足感を持ち、20名（44.4%）が充足感を持っていなかった。又8名（17.8%）は、援助を必要としていなかった。生活・保健指導に関しては33名（73.3%）が役割期待をもち、そのうち18名（40%）が充足感を持ち、15名（33.3%）が充足感を持っていなかった。又7名（15.6%）が援助を必要としていなかった。

V. 考察

研究結果より、母親は子どもに対する身の回りの世話や検査・処置などの直接的な援助よりも、相談・会話などの精神的な援助を看護婦の役割として認識し、期待が高いことが明らかになった。付き添い生活は母親の心身の疲労との関係が深く、筒井らは「看護婦に対して良い印象を持ち、いろいろ相談できる親は、心身の疲労が少ない」と述べている¹⁾。このことから、母親の精神的安定を図る上で、看護婦は重要な役割を持っている。

また、相談に関する援助は医療者と家族が協力して行うという意識が強いことから、母親は看護婦を含めた複数のサポートを必要としていることが考えられる。そのため看護婦は、母親を取りまくサポートシステムと連携をとり、調整していくことが重要である。しかし、約半数が看護婦からの援助が十分に得られていないと認識していたことは、89%の母親が看護婦に対して「忙しい」という印象を抱いており、看護婦の日常業務に追われている姿が反映されていると思われる。また母親が看護婦に相談したいと思っていることに対して、看護婦側の認識に格差があることなど、看護婦と母親の役割意識のずれが影響しているように思われる。そのため看護婦は母親との会話を重視し、母親が相談しやすい環境を整えるように、看護婦の意識の転換と配慮が必要である。

指導面については、40%の母親が入院中の生活指導を看護婦の役割と認識していた。子どもの入院に付き添うことにより、母子の生活は大きく変化し、母親は子どもへの接し方や、自分の役割が不明確となり混乱をきたしやすい。そのため子どもの症状観察に必要な知識や、病気を持つ子どもに接する上での注意事項についての説明・指導を、最も身近な存在で、専門的知識と経験を持つ看護婦に期待していると考えられる。しかし、看護婦の援助に対して充足感を持っている母親と、持っていない母親がほぼ同数であったことは、子どもの病気や病状の変化、入院生活の経過などによって、看護婦の母親への関わりにはばらつきがあることが考えられる。例えば子どもの病状が急性期であれば、母親には病状の変化に伴う生活そのものに対する指導が必要となり、慢性期であれば、母親が病気に対する知識や経験を持ち、社会生活に適応できるような保健指導が必要となる。看護婦はこれらのことを認識し、母親が子どものケアに参加できる知識と経験をもてるように指導・教育を計画的に進めていくこと、そして指導を行う時間を日常の看護業務の中に意識して位置づけ、母親が必要とする時を見極めて、主体的に行うことが重要であると考えられる。

VI. 結論

結論として、以下のことが明らかになった。

- ①母親は、不安や負担を軽減させるための精神的援助を看護婦に期待している。
- ②母親は、相談に関する援助を医療者や家族という複数のサポート資源に期待している。
- ③母親は、入院中の子どもの日常生活へのかかわり方に関する指導を、看護婦に期待している。

VII. おわりに

本研究では、対象者全員が子どもの入院に付き添いが必要であるととらえており、母親の付き添いは常に病床数の70%以上であった。この現状のなかで母親の置かれている状況を把握し、それに伴う役割期待を認識したうえで必要な援助を進めていくためには、今後さらに看護婦の受持制の強化が必要と考える。

引用・参考文献

- 1) 筒井真優美：小児看護をめぐる親の意識と実態，〈小児ケアの実態把握と小児リエゾン看護への提言4〉小児看護，16(8)，p1012-1016，1993.

- 2) 門脇ミツ子：家族参加と看護婦の認識，小児看護，13(6)，p658-663，1990.
- 3) 菊池祐三子，高橋孝子，井上富士美他：小児看護婦に対する母親の期待と現状アンケート調査を中心に看護のあり方を考える－聖マリアンナ医科大学研究業績，65，p60-64，1989.
- 4) 小林八生，竹田圭子，西村京子他：入院乳児の親のニーズとその要因－看護婦に求める心理的サポート－，第22回日本看護学会（小児看護）集録，p331-334，1991.
- 5) 森岡清美編：家族社会学，有斐閣双書，p38-52，1967.
- 6) 村田恵子，波多野梗子，伊東和子：入院患児の看護における看護婦と母親の役割(1)－看護婦からみた看護内容の現実と期待－，看護研究，10(2)，p109-117，1977.
- 7) 村田恵子，波多野梗子：入院患児の看護における看護婦と母親の役割(2)－看護婦および母親の看護活動の現実と現実認知・期待認知－看護研究，10(4)，p343-357，1977.
- 8) 中野綾美：慢性状態の子どもへのケアに対する看護者の専門職としての姿勢，高知女子大学紀要（自然科学編），45，p115-125，1996.
- 9) 小栗明美，杉田聡，花田裕子：母親が付き添うことに関する看護婦と母親の思いのズレの検討，第28回日本看護学会集録（小児看護），p72-75，1997.
- 10) 吉武香代子：小児看護における母親の付き添い〈患者にとって家族とは〉，看護教育，33(7)，p498-503，1992.

〔平成10年11月17日～18日，甲府市にて開催の第29回日本看護学会
(小児看護分科会) で発表〕